バスク語・コーカサス語と一般言語学[1]

下 宮 忠 雄

内容：§ 1. 序説　§ 2. バスク語　§ 3. バスク統一文語　§ 4. コーカサス　§ 5. 言語的位置づけ　§ 5.1. 歴史的　§ 5.2. 地理的　§ 5.3. 類型的　§ 5.4. 地域的・機能的　§ 5.5. 地理的・類型論的　§ 6. バスク語・コーカサス語の若干の文法的特徴　§ 6.1. 最古の文献　§ 6.2. 音韻体系　§ 6.3. 形態論。接頭法　§ 6.4. 接中法　§ 6.5. 接尾法　§ 6.6. 能格　§ 6.7. 文法性　§ 6.8 数詞　§ 6.9. 多人称性　§ 6.10. 従属文　§ 7. バスク・コーカサス起源の語　§ 8. 他語族との接触　§ 9. コーカサス言語連合　§ 10. バスク語と日本語　§ 11. 引用文献　§ 12. 欧文要旨。

§ 1. 序　　説

19世紀にドイツにおいて誕生した比較言語学の華々しい成果によって，印欧語族，セム語族，ウラル語族などの大きな言語集団の存在が確認され，語族内部の構成員相互の親族関係が明らかにされていった。ヨーロッパにおいては，ほとんどすべての言語が，系譜的な位置づけを与えられ，その起源と歴史が究明されているが，その例外として有名なのがバスク語である（ほかに，死語であるが，印欧言語学の謎とされるエトルリア語がある）。一方，印欧語域の東方に隣接するコーカサスはヨーロッパ人には terra incognita として知られ，10世紀のアラビアの史書・旅行記には「言語の山」と記述されているが，ここ

にはイラン系のオセート語やチュルク系のアゼルバイジャン語・カルムク語などを除く，いわゆる（本来の意味での）コーカサス語約40個が約500万人によって用いられている。これらのコーカサス諸語は既知のいかなる語族にも属さず[2]，独立した一個の言語群をなしているが，これが印欧語族などの意味での語族を構成するかいなか，すなわち一個のコーカサス共通原語態なるものを措定しうるかどうかは，ここ百年ちかい言語学者の努力にもかかわらず，いまだに確としていない。バスク語もコーカサス諸語も，印欧語には知られざる文法的特徴をいくつか有し，一般言語学的に興味ある材料を提供してきた。

§2. バスク語

これはピレネー山脈の西北部，スペイン・フランスにまたがる一万平方キロのせまい地域に行われる所属不明の，前印欧語的（すなわちインドヨーロッパ民族侵入以前からの）言語である。利用しうる統計はないが，ブリタニカ第15版（1974）によると，話し手の概数は50万以上である。しかしスペイン語・フランス語の二大文明語にはさまれ，大半は二言語併用者になっている。バスク語が公用語の地位を獲得したのはスペイン内乱の間，バスク自治政権下にあったほんの数か月の期間（1936—37）にすぎない。そのためにバスク語には標準語というものがない。

バスク方言学の最初の科学的な研究はルイ・リュシアン・ボナパルト公(1813—91，ナポレオンの甥にあたる)に負うているのであるが，それによるとバスク語は三つの上部方言群，50の方言，25の下位方言にわかれる。このうち主要な文語はラブール（labourdin），ギプスコア（guipuzcoan），スール（souletin），ビスカヤ（biscayen）の四方言である。なぜ小さな方言が群雄割拠しているのか。とくにラブールとギプスコアは文学的伝統を誇っている。前者はバスク語で書かれた最初の書物であるベルナト・デチェパレ(Bernat Dechepare，エチェパレのベルナト）の詩集（Linguae Vasconum Primitiae, Bordeaux

1545)，ついでヨアネス・レイサラガ (Ioanes Leizarraga)による新約聖書 (La Rochelle, 1571) という古典的な作品をもつ。ギプスコア方言はララメンディ (Manuel de Larramendi) による最初のバスク語文法 (Salamanca, 1729) とスペイン・バスク・ラテン三言語辞典 (San Sebastián, 1745) をもち，その文化中心地サン・セバスチャンにはギプスコア大学 (Estudios Universitarios y Técnicos de Guipúzcoa) がある。

§ 3. バスク統一文語

バスク語アカデミー (Academia de la Lengua Vasca, バスク語名 Euskaltzaindia) 創設50周年を記念して1968年1月スペイン・ビスカヤ州都ビルバオ (Bilbao) でバスク語統一のための委員会が設立され，アカデミー会長マヌエル・レクオナ (Manuel Lecuona) によって，アカデミー会員ルイス・ミチェレナ (Luis Michelena, 1967年以後 Antonio Tovar の後任としてサラマンカ大学・印欧言語学教授，バスク人)が委員長に任命された。ミチェレナ教授はただちに基礎案の作成にとりかかり，一般原理・正書法・語彙・形態論・統辞論についての案文が同年10月アランサスウ (Aránzazu)での会議に提出され，統一案が採択された。この原文はアカデミー機関誌「エウスケラ」(Euskera) 第13巻 (1968) にバスク語で掲載されている（ちなみに euskera はギプスコア方言形で，euskara は統一バスク文語形)。そのテキストをスペイン語に訳し，解説を付したものが，いまのアカデミー会長ルイス・ビリャサンテの「共通文語のために」(Villasante 1970) という小冊子となってあらわれている。ミチェレナ教授は1970年の私信で，標準語化されつつあるバスク語はギプスコア方言を基礎とし，ナバロ・ラブール方言の要素もとりいれられていると述べているが，筆者[3]が彼地で得た第一印象はむしろ逆で，ギプスコア方言がラブール方言にひっぱられた（接近した）ように感じられた。ギプスコア形の det (私はそれをもつ)，degu (私たちはそれをもつ)，aundi (大きい)，euskera (バ

スク語）に対し，統一バスク語（euskera unificado, バスク語で euskara batua）はラブール形の dut, dugu, handi, euskara を採用している。出版物の量においても話し手の数においてもギプスコア方言のほうが大きいと思われていたのに，ラブール方言の根強さと威厳をはっきりと感じた。

バスク統一文語の必要性は明白かつ必至である。次の世代の子弟に教えなければ，バスク語は存続しえないであろう。初等教育においてこれをとり入れなければ忘れさられてしまうであろう。バスク語教育のためには統一された言語形式が必要となる。かかる高尚な試みは弱小方言の生命をますます脅かすものだとする専門の言語学者もあるが，統一文語の誕生はわれわれ外国人学習者にとってもありがたいことである。バスク語の話し手が急減しつつあることを如実に語る数字を一つあげておこう。これはエウスケラ第13巻に載っている「ギプスコア州の今日の児童におけるバスク語」という論文（Gaur 1968）であるが，1966—67学年度ギプスコア州82の市町村のうち解答のあった75市町村についての統計によると，スペイン語のみをじょうずに話す者54.1%，スペイン語はじょうずにバスク語はへたに話す者12.2%，スペイン語・バスク語ともにへたな者17.2%，スペイン語はへたにバスク語はじょうずに話す者13.9%，バスク語のみじょうずに話す者 2.6 %となっている。

§ 4. コーカサス

コーカサス（*Καῦκασος*, *Καυκάσια ὄρη*）はその語源「高地」（ゴート語 háuhs「高い」，古代ノルド語 haugr「丘」）が示すように，またプロメテウスや黄金の羊毛の神話が示すように，古代ギリシア人には接近しがたい，遠い国のように思われていた。西紀前後のギリシアの地理学者ストラボーンは黒海東岸のギリシア植民地ディオスクーリアス（今日のスフミ Suchumi 付近）について「そこには70の民族が集まっており，民族の数は 300 という者さえいる。それぞれ異なる言語を話している。みな勝手気ままに，未開人のように，ばらばら

に，たがいに交渉もなしに住んでいるからである。大部分はサルマティア人であるが，すべてコーカサス人である」（ストラボーン11，2，16）と言っている（Klimov 1969：1）。

多様で複雑なコーカサス諸語はつぎの三言語群に大別することができる。

(1) 南コーカサス語：ジョルジア語（グルジア語），ミングレル語，ラズ語，スヴァン語。このうちジョルジア語は話し手の数260万で，コーカサス最大の言語であり，また西暦5世紀以後文学的伝承をもち，コーカサス唯一の文明語である（アルメニア語も同様1500年の長い文学をもつ）。南コーカサス語群はカルトヴェリ語群（kartveli はジョルジア語で「ジョルジア人」の意）とも呼ばれ，その4言語間の親族関係が立証されている。

(2) 西コーカサス語：アブハズ語，アバザ語，ウビフ語，アディゲ語（＝低チェルケス語），カバルディ語（＝高チェルケス語）。このうちウビフ語はトルコ領内の Sapanca, Manyas など二，三の村落に話されるのみで死滅寸前の状態にあるが，1931年以後，印欧比較神話学者でコーカサス学者のデュメジル（Georges Dumézil 1891—）らの努力により多量の民話テキストが採集されている。ウビフ人は1864年ロシヤ軍による征服の後，すべてトルコに移住した。

(3) 東コーカサス語：ナフ諸語（nax は「民族」の意。または中部コーカサス語，あるいはその主要言語をとってチェチェン諸語ともいう）ダゲスタン諸語の二つの言語群を含む。前者はチェチェン語（42万），イングーシュ語（10万），後者はきわめて多様な大小の言語がひしめいているが，アワル語（24万）はダゲスタン自治共和国（ダゲスタンは山岳地帯の意；トルコ語 dağ「山」，stān はイラン語で国名を作る接尾辞，印欧語根 *stā-）におけるコイネーの役割をはたしている。

§ 5. 言語的位置づけ

バスク語もコーカサス語も，研究の現段階では，孤立語である。したがって

両者をゲルマン語とロマンス語，あるいはフィン語とウゴル語の場合のように系譜的に位置づけることはできない。

§ 5.1.

歴史的には，バスク語は，いわゆる地中海諸語の最後の生存者と考えられている。かつて地中海地域に行われていた多くの言語が前印欧語民族および印欧民族のたびかさなる侵入の波によってことごとく死滅してしまったが，それを生きのびたのがバスク語である。紀元前三千年紀から二千年紀のかわり目にはじまる印欧語化の時代以前には，ピレネー山脈からヒマラヤに伸びる一連の褶曲山脈によって形成される地帯，すなわちドイツの言語学者Gunther Ipsenがユーラシアのわだち（Eurasisches Geleise, 1924, cf. 拙稿「ユーラシアのわだち」弘前大学人文学部紀要 1970, 39—52）と呼んだ地域には，今日残るバスク語，コーカサス語，ブルシャスキ語のほかにイベリア語，イタリア・シチリア・サルデーニアの前印欧語，ペラスギ語，エトルリア語が用いられていたが，それらは一つの南ユーラシア的言語連続体（continuum）を形成していた。

ドイツの言語学者カール・ボウダ（Karl Bouda, 1901—）およびフランスのルネ・ラフォン（René Lafon, 1899-1974）はバスク語とコーカサス語の間に一連の語彙的・形態論的・類型的共通性を克明に収集し，両者の間に親族性があることを立証しようとした。Lafon 1960, Lafon 1973にはバスク語とコーカサス語の間の音韻対応の例があげられている。これに対しドイツの比較言語学者ゲルハルト・データース（Gerhard Deeters, 1892—1961, 1935—1960 ボン大学教授）やノルウェーの言語学者ハンス・フォークト（Hans Vogt, オスロ大学名誉教授）は，親族関係を認めるには比接の例があまりにも少なく，バスク語との比較を試みる前にまずコーカサス内部の徹底的な研究を行ないコーカサス諸語を一個の共通原語態に帰属せしめることに成功したのちにはじめて他の語族との比較を行なうべきであるとしている（これは1924年 N. S. Trubetz-

koy の見解でもあった)。関係の遠い言語を比較する場合には，似ているが同系でない単語，似ていないが同系の単語（ähnlich aber nicht verwandt, und unähnlich aber verwandt——Deeters）があることに注意しなければならない。ジョルジア語 dγe「日」，ゴート語 dags「日」；ジョルジア語 tbili「暖い」(Tbilisi の語源で，この旧都は昔から温泉で有名)，ラテン語 tepidus, 古代インド語 tápate, ロシヤ語 tëply（Vogt 1938：337）；ジョルジア語 maγali「高い，偉大な」，ギリシア語 μέγας，テテン語 magnus（Polák 1950：101）[4] は偶然の類似であり，スペイン語 comer と英語 eat, ポルトガル語 cheio と英語 full, ポルトガル語 vir と英語 come は，外見上の大きな相違にもかかわらず，その同源性が歴史的音韻論によって説明しうるのである。

§ 5. 2.

地理的には，バスク語とコーカサス語は周辺的印欧語ないし側印欧語的(peri-indeuropeo, para-indeuropeo)[5] 言語である。印欧語とは adstratum(接層）的関係に立つ。印欧語との交渉は，バスク語の場合はロマンス語をとうして，コーカサス語の場合はギリシア語・アルメニア語・ペルシア語・オセート語をとうして行われてきた。印欧語・ウラル語の接触の場合のように，言語材の提供者は印欧語であり，バスク語・コーカサス語は受領者である。(→§8)

§ 5. 3.

類型的には，バスク語とコーカサス語は能格構文（Ergativkonstruktion）をもち，印欧語・ウラル語・セム語の対格構文と対立をなす。これはトゥルベツコイが1936年印欧語民族問題考と題する講演において言及したものである(Trubetzkoy 1939：87)。(→§6. 6.)

§ 5.4.

地域的・機能的には，バスク語はヨーロッパの沿岸連邦（Litoral-Bund）に属する。ハンブルク大学のウラル語学者ジュラ・デーチ（Décsy 1973）はヨーロッパに行われる62個の言語（印欧語41，フィン・ウゴル語12，その他9）を地域的・機能的観点から大言語（標準平均ヨーロッパ連邦），ヴァイキング連邦，沿岸連邦，ペイプス連邦，ロキトノ連邦，ドナウ連邦，バルカン連邦，カマ連邦，島言語，宗教的島言語の10言語群に分類しているが，沿岸連邦にはバスク語のほかにフリジア語（フリースランド），オランダ語，スペイン語，ポルトガル語，マルタ語を含み，その特性は陸地が海に開かれていること（Seeoffenheit）である。バスク人は敬虔なカトリック教徒であると同時に漁猟民としてもすぐれ，アイスランドまで遠征を行なった（Deen 1937）。

§ 5.5.

地理的・類型論的には，バスク語はスペイン語・フランス語・イタリア語・アイルランド語・英語・スウェーデン語とともに大西洋地域（Atlantisches Gebiet, Lewy 1942）に属し，その特性は屈折孤立化の方向に向かう（flexions-isolierend）ことである。バスク語 gizon ona（the good man）の属格は gizon onaren（the good man's）となり，ラテン語 virī bonī のように統合体（syntagm，ここでは名詞＋形容詞）の両方の要素が屈折することはない。

§ 6.

バスク語・コーカサス語の若干の**文法的特徴**。マクロ類型論の試み。チェコの言語学者スカリチカ（Skalička 1967）は類型論にミクロとマクロの区別を設け，ミクロ類型論はゲルマン諸語とかスラヴ諸語のように密接な関係をもつ言語群内部の形態論・統辞論・音韻論・語彙の異同を扱い，マクロ類型論は超語

族的・言語普遍的観点から諸言語の類型を扱う。以下，若干の文法的特徴を中心にバスク語とコーカサス語の特性をのべる。

§ 6.1. 最古の文献（言語資料）

バスク語で書かれた最古の本は既述のように（p. 132）1545年であるが，10世紀以後，若干の語句，地名・人名が知られている（Michelena 1964）。コーカサスにおける文学的伝統はアルメニアの伝導師メスロプ・マシュトツ（Mesrop Maštoc 361/2-440）による文字の創造と5世紀以降アルメニア語およびジョルジア語への聖書翻訳にはじまる。印欧語の場合は紀元前1700年ごろにはじまるヒッタイト語があり，これにつづくヴェーダ語，ミュケーナイ語とともに3500年にわたる歴史をもち，バスク語やコーカサス語に比してきわめて恵まれた条件にある。コーカサス語の書記記録は，ジョルジア語を除けば他はすべてせいぜい19世紀に，大半はソビエト時代になってからようやくはじまったものである。

§ 6.2. 音韻体系

バスク語の音韻体系は全般的にスペイン語のそれに似ている。音素の数は他の言語にくらべると比較的少ない。5個の母音，二系列の閉鎖音 p t k, b d g, 鼻子音 m n ñ (palatal n), l, ll (palatal l, λ), r, rr（軟音の r：hari「糸」，硬音の r：harri「石」）。スペイン語やフランス語と異なり，バスク語は三種の s 系音を区別する。z/s/ (sifflante pure——Lafon の用語，以下同)，s/š/ (mi-chuintante)，x/š/ (chuintante)，および対応の破擦音 tz/c/, ts/ć/, tx/č/ である。硬蓋化音はしばしば指小的・愛称的意味をもつ。sagu「はつかねずみ」／xagu「はつかねずみの子」；zakur「犬」／txakur「小犬」（ただしこの語はビスカヤ方言およびギプスコアの Goierri 方言ではもはや指小的な意味をもたない——Azkue）。バスク語では語頭に r 音が立ちえないので，ラテン語

rege(m), rota はバスク語 errege「王」, errota「風車」のようになる。

コーカサス語は母音音素の僅少と子音音素の豊富によって特徴づけられる。(Šarašidze1967：32) ウビフ語は母音3，子音83（以下3/83のように記す），アブハズ語2/57（母音は /a/ と /ə/），チェルケス語3/53，アワル語5/41，ジョルジア語5/28。ジョルジア語の母音は /a e i o u/ であるが，子音体系の特徴は /p ṗ b/ /t ṭ d/ /k ḳ g/ /c ç ʒ/ /č ç̌ ǯ/ のように閉鎖音と破擦音に無声帯気音・無声声門閉鎖音（glottoclusiva）・有声音の三系列をもつことである[6]。ジョルジア語には /f/ がなく（/v/ はある），バスク語も外来語にのみ /f/ があらわれる（ジョルジア語 pilosopia, バスク語 fede, faltsu)。ジョルジア語は語頭に5個ないし6個の子音集積を許す（vbrçq̇inav 私は輝く，vbdγvni 私は〔羽を〕むしる，その異形 vbrdγvni は7個の子音をもつ)。これらの例において v, r はソナント（v̥, r̥）であるが stkva「彼は言った」は純粋な4個の子音連続をもつ。

アクセントが示差的機能をもつことがある。バスク語 elizá《l'église》, elíza《église》(Lafon 1973：74)，アブハズ語（西コーカサス語）á-pa-ra「跳躍」, a-pára「金銭」, a-pa-rá「編む」(Deeters 1963：30)。

§ 6.3. 形態論

語頭屈折，接頭法(preflexion, prefixation)。その好例はバントゥー語 mu-ntu「人間」，その複数 ba-ntu, bu-ntu「人類」, ci-ntu「言語」(Pottier 1968：315) であるが，バスク語の形態法はもっぱら語末屈折，接尾法（sufflexion, suffixation, agglutination）であり，助動詞における人称代名詞直接目的語に語頭屈折がみられる。nik aita ikusi *dut*「私は父を見た」(dut=I have him において d- は3人称直接目的語の指標，-t は1人称単数行為者の指標，nik「私は」の -k は能格語尾)，aitak ni ikusi nau「父は私を見た」(nau=he has me において d- は1人称単数直接目的語の指標，3人称単数行為者の指標はゼロ)。

nator「私は来る」, dator「彼は来る」から自動詞の行為者指標 n-, d- を得る（不定形 etorri「来る」）。また nator の強調形 banator「私は来ますよ」に ba- の接頭がみられる。

ジョルジア語の場合も，バスク語と同様，統辞的関係を示す諸要素は動詞に集中する。すなわち動詞の基体に形態素が接頭あるいは接尾する。me var=I am, me vçer=I write, čven vart=we are, čven vçert=we write から v- が1人称行為者を示す接頭辞，-t がその複数を示す接尾辞であることがわかる。東コーカサス語（例アワル語）においては類指標（Klassenzeichen）が動詞に接頭する（→§6.7.）。西コーカサスのアブハズ語は定冠詞を前接する（Deeters 1931：293）。a-ž'=die Weintraube, a-ž'ə=das Fleisch, der Leib, a-là=der Hund.

§6.4. 語中屈折，接中法（introflexion, infixation）

印欧語においては infix の例はラテン語 vi-n-cō, ru-m-pō, ポルトガル語 comprá-lo-ei (I'll buy it) にみえる。語中屈折の例は sing, sang, sung, song. バスク語における接入辞は目的語複数指標 -it- が顕著なものである。liburua ikusi du=he has bought the book に対し liburuak ikusi d-it-u=he has bought the books となる。助動詞 du=he has it, ditu=he has them. 与格とともに用いる場合は目的語複数の指標は -zki- となる。liburua eman diot =I have given him the book に対し目的語複数の場合は liburuak eman di-zki-ot=I have given him the books となる。助動詞 diot=I have it to him, dizkiot=I have them to him.

ジョルジア語には印欧語と同じようなアプラウトがあらわれる（→§9）。ḳar-/ḳr「結ぶ」の現在語幹はゼロ階梯，アオリストは完全階梯をもつ。その人称変化は現在 1. v-ḳr-av, 2. ḳr-av, 3. ḳr-av-s, アアリスト 1. v-ḳar, 2. ḳar, 3. ḳr-a（複数省略）。ジョルジア語に特徴的な利害関係をあらわす文

法範疇（ジョルジア語で kceva, 西欧語では直訳して version という），たとえば (1) v-a-ḳeteb=I do (for nobody だれのためにでもなく)，(2) v-i-ḳeteb =I do (for myself 自分自身のために)，(3) v-u-ḳeteb=I do (for some one else 他人のために，ここでは彼のために）の三つの転を区別し，それぞれ saarviso（中立転，だれのためでもなく，arvi 〈aravin だれも……ない)，sataviso（再帰転，自分のために，tavi「自分自身」)，sasxviso（他帰転，他人のために，sxva「他の」）と呼ぶ。sataviso の用法は印欧語の medium に似ている（Schmidt, 1965)。この母音は Versionsvokal（Deeters は Charaktervokal）と呼ばれるが，この母音交替は語中屈折というよりはむしろ接頭辞交替である。また名詞屈折においては çq̇ali「水」（主格)，çq̇alma（能格）に対して çq̇lis（属格）のように属格以下において語幹母音が脱落（syncope）するものが多い。melani「インキ」(主格，ギリシア語からの借用語，*μέλαν*)，melnit「インキで」(造格)。ロシヤ語における類似の現象と比較せよ（otec, otca)。

§ 6.5. 語末屈折，接尾法（sufflexion, suffixation）

バスク語においてもコーカサス語においても，これがもっともふつうに用いられる形態法である。バスク語はもっぱら接尾的な言語（suffixing language）である。ポーランドの言語学者タデウシュ・ミレフスキーのいう形態素後置的言語にあたる（Milewski 1973：170 postpositional language where syntactic members are suffixed)。バスク語の曲用はただ一つあるのみで（トルコ語，ハンガリー語，フィンランド語と同様)，接尾辞ないし後置詞が数と格を示す。gizon-a=the man, gizon on-a=the good man, gizon-a-r-en=of the man, gizon on-a-r-en=of the good man (-r- は euphonic, 母音衝突をさけるため)。印欧語の場合のように性数格の一致(屈折要素のくりかえし redundancy) はバスク語では行われない（Schuchardt 1968：1)。ジョルジア語は「形容詞＋名詞」の統合体において形容詞は「弱い」屈折を示す。すなわちバスク語

（ハンガリー語・トルコ語）と印欧語の中間的な段階を示す。çiteli vardi[7]「赤いバラ」（主格），çiteli vardis（属格），çitel vards（与格）など。フィンランド語は印欧語と同様に形容詞も屈折する。ハンガリー語 magas hegyen に対しフィンランド語は korkealla vuorella「高い山に」という（magas=korkea「高い」）。これをデンマークの言語学者サンフェル（Sandfeld 1936）は印欧語からの統辞的借用とみる。

§ 6.6. 能格（ergative）

自動詞の主語は主格に立つが，他動詞の主語（行為者）は能格に立ち，その目的語（受動者）は主格に立つ。この構文を能格構文，この構文をもつ言語を能格言語という（能格の本質については泉井久之助博士の「言語構造論」1947, p. 65 以下に立ち入った考察がある）。バスク語とコーカサス諸語に共通の文法的特徴のうちもっとも重要なものがこの能格構文であるが，類似の現象はグリーンランド語（Schultz-Lorentzen 1945），近代インドイラン語（Regamey 1954），オスチャク語（Gulya 1970），旧シベリア語のうちのチュクチ語（Worth 1963），オーストラリアのワルング語（Tsunoda 1975）にみられる。

バスク語 gizona dator（男は来る，gizon-a は「男」の主格，-a は後置定冠詞），andrea Donostian bizi da（婦人はサン・セバスチャンに住んでいる，andre-a「婦人」は主格，ケルト語からの借用），haurra ikastolara doa（子供は学校に行く，haur-r-a「子供」，ikastola「学校」）においては，自動詞の行為者（主語）はすべて主格に立っている。d-ator, d-a, d-oa の d は3人称行為者の指標である（3人称複数ならば datoz, dira, doaz となり，1人称単数ならば nator, naiz, noa となる）。Gizonak andrea dakusa[8]（男は女を見る），andreak Donostian etxe polita du（婦人はサン・セバスチャンに美しい家をもつ），haurrak euskaraz ikasten du（子供はバスク語を学ぶ）においては，他動詞の行為者は能格に立っている（能格語尾 -k）。その目的語は主格（ゼロ

語尾，裸の格形）に立つ。dakusa（彼はそれを見る），du（彼はそれをもつ），ikasten du（彼はそれを学ぶ，原形 ikasi）の d- は3人称目的語の指標で，他動詞の場合の3人称行為者の指標はゼロとなる（私は学ぶは ikasten dut で，dut の -t が1人称行為者指標）。

コーカサスにおいては，他動詞の行為者をあらわす格はさまざまである。南コーカサス語（ジョルジア語など）・ナフ諸語（中部コーカサス語）・アルチ語（東コーカサス語）は能格，アワル語・ダルギ語・レズギ語・タバサラン語（以上いずれも東コーカサス語）は造格（instrumental），ラク語（東コーカサス語）は属格，ディド語（東コーカサス語）は内格（inessive）を用いる（Deeters 1963：56）。

ジョルジア語においてはアオリスト時制の場合にのみ能格構文が用いられ，kmna γmertma ca da kveḋana（神は天と地を作った）において，γmert-ma（神）は能格（-ma），ca（天）と kveḋana（地）は主格となる。これをシュハート（Schuchardt 1895, 1923）は〔geschaffen wurde〕〔von Gott〕〔Himmel und Erde〕と解釈した（他動詞の受動態的性格）。「天と地」が主格であることから，能格構文は印欧語の受動態に似ているが，しかし受動態でもって訳すべきではない。なぜなら，ここではこの文が第一次的なものであり，能動態からの受動変形ではないからである。student-ma daçera çerili（学生は手紙を書いた）から受動形 çerili daiçera studentis mier〔手紙，主格〕〔書かれた，受動態アオリスト〕〔学生，属格〕〔...によって〕を作ることができる（Tschenkéli 1958：I. 155）。シュハートの小冊子（1923）はルカ伝の放蕩息子のたとえ話を材料にバスク語の文法構造をくわしく説明したもので言語学的にはきわめて便利な入門書であるが，受動態翻訳の行間翻訳は非常に読みづらい。

以上をまとめて図示すると次もようになる（拙稿「能格について」Otsuka Review 8〔東京教育大学大学院英文学会 1971〕166-175）。

バスク語　Jaungoikoak[1] egin du[2] ludia.[3]

神は[1] 世界を[2] 作った[3]。

ジョルジア語　kmna[1] γmertma[2] kveqana.[3]

神は[2] 世界を[3] 作った[1]。

	行為者	他動詞	受動者（目的）
バスク語，ジョルジア語など	ergative	能動態	nominative
印欧語	nominative	能動態	accusative

能格構文といっても言語によって用法上の若干の相違がある。バスク語では mutilak sagarra jaten du〔少年は，能格〕〔りんごを，主格〕〔たべ・る〕は能格構文を用いるが，「少年はりんごをたべている，たべつつある」の場合は自動詞構文となり mutila sagarra jaten ari da〔少年は，主格〕〔りんごを，主格〕〔たべる〕〔最中で ari〕〔ある〕となる。ジョルジア語においては現在時制・完了時制は異なる構文を用いる。

	学生は	書く	手紙を
現在	studenti　主格	cers	cerils　与格
アオリスト	studentma 能格	dacera	cerili　主格
完了	students　与格	dauceria	cerili　主格

印欧語の統辞法においては nominative：accusative の二項が根本的な対立をなすのに対して，バスク語やコーカサス語においては ergative：nominative の対立が統辞法の根底をなしている。上記ジョルジア語現在の文において行為者が主格に立つのは印欧語的統辞法であるが，これをクノープロッホ（1963年以後 G. Deeters の後任としてボン大学教授，1961：552）は動詞体系の最新層と認め，そこに能格言語の影響が力及ばなかった結果を見る。これに反しデータース（Deeters 1963：59）は現在時制の構文を自動詞的に解し，目的語であ

る与格を位格（locative）と考える。is[1] vašenebs[2] saxls[3]「彼は[1] 家を[3] 建てる[2]」を er[1] bau-end-ist[2] am-Hause[3] と解釈する。

§ 6.7. 文法性

バスク語・コーカサス語には印欧語・セム語の文法性がない。東コーカサス語はそのかわりに名詞類（nominal classes）の区別をもち，これが文構造の全体を支配する。アワル語（東コーカサス）における文法類（classe grammaticale）の一致例（Trubetzkoy 1964：26)。hau či vugo χerau (dieser Mann ist alt), hai čužu jigo χerai (diese Frau ist alt)。hab ču bugo χerab (dieses Pferd ist alt)。第1の文には第1類（男性理性物）の標識 u (v) が指示形容詞・動詞・形容詞にみえる。第2の文には第2類(女性理性物)の標識 i (j) が，第3の文には第3類（動物・植物・個物)の標識 b がみえる。アワル語においては動詞は人称によってではなく名飼の類によって活用する。自動詞の場合は主語の類によってつぎのように活用する（conjugaison subjective)。v-ugo（第1類）《je suis, tu es, il est》; j-igo（第2類）《je suis, tu es, elle est》; b-ugo（第3類）《il est, elle est》; r-ugo（第1・2・3類複数）《nous sommes, vous êtes, ils sont, elles sont》.

アワル語の他動詞は目的語の類により活用する（conjugaison objective, Čikobava 1962：30)。v-ačuna（第1類の目的語）《je l'amène, tu l'amènes, il l'amène (lui)》; j-ačuna（第2類の目的語）《je l'amène, tu l'amènes, il l'amène (elle)》; b-ačuna（第3類の目的語）《j'amène, tu amènes, il amène (quelque chose)》; r-ačuna（複数の目的語）《j'amène, tu amènes, il amène (les hommes, les femmes, les choses etc.)》。

西コーカサス語と南コーカサス語（ジョルジア語）においては類ではなく人称の範疇が文構造を支配している。

§ 6.8. 数詞

印欧語の十進法に対し，バスク語・コーカサス語は二十進法(vigesimal system) をもつ。バスク語 10 hamar, 20 hogei, 30 hogeitahamar (hogei-eta-hamar), 40 berrogei (2×20), 50 berrogeitahamar (2×20+10), 60 hiruetan hamar (3×20) など。この hogei(ラブール方言形 hogoi)はケルト語からの借用らしい (Tovar 1954 : 56)。その場合は古代アイルランド語 fiche<*wi-k̂m̥t-s, 中世キムリ語 ugeint, コーンウォル語 ugens, ugans (H. Pedersen のケルト諸語比較文典 II p. 129)。バスク語は「100」に独立の語 ehun をもつ（スウェーデンの言語学者 Nils Holmer やドイツの Joseph Karst は e+hun と分析してゲルマン語からの借用語とみる)。印欧語のうちでは，近代ケルト語はすべて二十進法を用い（ケルト語における改新)，デンマーク語・フランス語にその残存がみられるが，ポコルニ (Pokorny 1962) によると，その分布地域は（紀元前1900年以後）中部ヨーロッパに侵入したアルメノイド系の鐘形杯民族 (Glockenbecherleute, Beaker Folk) の植民地である。

コーカサスにおいては本来二十進法が支配していたようで，近代になってロシヤ語の影響で十進法に移行したものが若干あるとはいえ，依然二十進法が有力である。ジョルジア語は純粋な二十進法を保っており（正確には二十進法と十進法の組合せ，30=20+10)，10 ati, 20 oci, 30 oc-da-ati (da="and"), 40 or-m-oci (2×20, m=meṭi "more"), 50 or-m-oc-da-ati (2×20+10), 60 sam-oci (<sam-m-oci 3×20)，など。「100」に独立語 asi をもち，「1000」は at-asi (10×100) という。徹底した二十進法をもつのはバツ語（中部コーカサス）で，「100」の語がないために1955を 4×20×20+17×20+15 のように表わす (Deeters 1963 : 67)。

§ 6.9. 多人称性（polypersonalism）

印欧語の動詞定形 amō, habēs などは行為者の人称を示すが，バスク語やジョルジア語はその動詞の人称形に主語のほか直接補語・間接補語の三種の指標を具現する。この種の動詞形を多人称的という。バスク語 aita[1] ikusi[2] dut[3]「父を[1] 私は[3] 見[2] た[3]）における助動詞 dut は "I have him (her, it)" で，d- は3人称目的語，-t は1人称単数主語を示す指標，ikusi は動詞の原形である。Aitak[1] ikusi[2] nau[3]（父は[1] 私を[3] 見[2] た[3]）の nau は "he has me" で，n(a)- は1人称単数目的語の指標，3人称主語の指標はゼロである。3個の人称指標をもつ例：sagarra[1] aitari[2] eman[3] diot[4]（私は[4] 父に[2] りんごを[1] 与え[3] た[4]）における diot は "I have it to him" にあたり，行為者，間接補語，直接補語の3個の指標を含む。aitak sagarra eman dit（父は私にりんごを与えた）において dit は "he has it to me" にあり3個の人称指標をもつ。上記の2文においてりんごが複数の場合は sagarrak aitari eman dizkiot, aitak sagarrak eman dizkit となる（dizkiot=I have them to him, dizkit=he has them to me)。さらにバスク語では親称2人称単数において話しかける相手が男性であるか女性であるかによって異なる助動詞を用いる。sagarra eman didak（君〔男〕は私にりんごをくれた），sagarra eman didan（君〔女〕は私にりんごをくれた)。

§ 6.10. 従属文

印欧語においては最古の時代から従属文が発達しているが，バスク語やコーカサス語においては従属文の表現は異なる統辞法によっている。バスク語においては動詞の人称形に接尾辞あるいは接頭辞を付して表現される(Lafon 1960：85)。ikusi dugu (we have seen him) と eri zen (he was ill) を結んで「われわれが彼に会ったとき，彼は病気だった」という文を作る場合は dugu (we

have him）に関係接尾辞 -n と単数内格接尾辞 -ean を付して ikusi dugune-an とすると when we saw him の意味となる。-nean（when）の原義はスペイン語で《en lo que》である。接尾辞 -la は英語の接続詞 that...にあたる liburua erosi dut（私は本を買った）→liburua erosi dudala〔〈dut-a-la〕esan diot）私は本を買ったと彼に言った），etorriko da（彼は来るだろう）→etorriko dela esan digu（彼は来るだろうとわれわれに言った）。ウラル語においては本来接続詞がまれで従属法がなく，分詞を用いてこれを表現した（Austerlitz 1968：1374）。たとえば《le chasseur qui fit la chasse tua l'ours qui se promena dans la forêt et mangea du miel》のような文は〔faisant-la-chasse chasseur, dans-la-forêt se-promenant du-miel mangeant ours, tua〕と表現される。

コーカサス諸語のうち南コーカサス語のみは印欧語的統辞法を思わせる従属接続詞や関係代名詞を用いた従属文が豊富に発達している（Shimomiya 1973）。ジョルジア語には印欧語におけると同じように疑問代名詞に由来する関係代名詞が3つある。romelic "der, welcher"（romeli？"welcher？"），vinc "wer, he who..."（vin？"wer？"），rac "was, that which"（ra？"was？"），is[1] mecnieri,[2] romelic[3] çers[4] am[5] çigns,[6] čemi[7] ḳargi[8] megobaria[9] = der[1] Gelehrte,[2] welcher[3] dieses[5] Buch[6] schreibt,[4] ist mein[7] guter[3] Freund.[9]（Tschenkéli 1958：I. 202）。構文も語順も印欧語のそれときわめて類似している。ジョルジア語の関係接尾辞 -c は起源的に me-c（私も），çigni-c（本も）などの -c と同じである。バスク語においては関係接辞 -n を動詞人称形に付して関係文を作る。ikusten dugu guzti(a)（we see everything），ikusten dugun guztia（everything〔that〕we see）→Jaungoikoak[1] ikusten[2] dugun[3] guztia[4] egin[5] du[6]「神は[1] われわれが[3] 見[2] るところの[3] すべてを[4] 作[5] った[6]」（Lopez—Mendizabal 1970：5）。中部コーカサスのバツ語にはジョルジア語の影響で従属文が発達している（Klimov 1969：53）。

以上の文法的特徴を図示すると大略つぎのようになる。

	バスク語	コーカサス語	印欧語	ウラル語
1. 最古の文献	16 世紀	5 世紀	前18世紀	11 世紀
2. 母音・子音	(v) (c)	(v) c	v c	v (c)
3. 語頭屈折	−	(+)	(+)	−
4. 語中屈折	(−)	(−)	(+)	(+)
5. 語末屈折	+	+	+	+
6. 能格	+	+	−	(−)
7. 文法性	−	(−)	+	−
8. 数詞の体系	20	20	10	10
9. 多人称性	+	+	−	(−)[1]
10. 従属文	−	(+)[2]	+	(+)

1) ハンガリー語の対象活用 +　　2) ジョルジア語 +

§ 7. バスク・コーカサス起源の語

地中海的基層言語およびそれを仲介とするバスク語・コーカサス語の語彙的関連はスイスの言語学者・ベルン大学教授ヨハネス・フープシュミート（Hubschmid 1960 ほかおびただしい著書・論文）によって研究されている。例：前ロマンス語根 *kario-, *karri-, バスク語 harri「石」, アルメニア語 kar「石, 岩」, ジョルジア語 karkar-i「裸岩」, ベルベル語 akerkur「岩塊」; バスク語 zakur, txakur「犬」, 中世ギリシア語 ζάγαρι, サルデーニア語 dźáγaru, ǧágaru, jákaru, コルシカ語 ghiágaru, gyákaru, jákaru, ジョルジア語 dzáγli, ブルシャス語 hor 〈*hogor; バスク語 maguri「いちご」, 高アルプス amagaoudo 〈*magualda「いちご」, ジョルジア語 maq̇vali「黒いちご」

§ 8. 他語族との接触

バスク語はフランス語とスペイン語の二大文明語にはさまれているため，語彙的・音韻的・語法的借用がおびただしく，Lafitte (1962：27) によるとロマンス語ないしラテン語からの借用語は辞書の75%近くを占めるという。この問題は Rohlfs 1927, Gamillscheg 1950, Michelena 1974 に扱われている。若干の例をあげると，ecclesia > eliza「教会」，catena > kate「くさり」，denariu > diru「かね」（ちなみに鼻音消失はポルトガル語にもみえる corona > coroa, luna > lua)，alma > arima（l > r はガスコーニュ語，すなわちバスク語基層の上に生じたガリアのロマンス語，にもみえる，Gamillscheg 1950：36)，libru > liburu, pace > bake, verbu > berbo「言葉」（バスク語に古典ラテン語の原義が残る，berbo egin「言葉を為す」>「話す」)。ケルト語からは andre「婦人」(cf. アイルランド語 ainder)，ゲルマン語からは eskatu「乞う」(ゴート語 *aiskōn, 古代高地ドイツ語 eiskôn)。

しかし近代ヨーロッパ文明語彙を固有の言語財で表現しようとする努力はバスク語にも見られる（purism の点でもっとも有名なのはアイスランド語であろう)。例：diru-etxe「銀行」(money-house)，hegazkin「飛行機」(flying-tool)，urrutizkin「電話」(far-speaking-tool)，Eguberri「クリスマス」(Day-New)，Berri Ona「福音書」(news-good, cf. gōd-spel)，itxasandi「大洋」(sea-large)，Atlantiku Itxasandia「太西洋」，Pazifiku Itxasandia「大平洋」，indarrezko「電気の」(indar「力」，indarrez「力で，動力で」，-ko は属格語尾)，garbitontzi「洗濯機」(wash-vessel)，itxasontzi「汽船」(sea-vessel)。外来語 auto「自動車」と並んで自国の言語財を用いた beribil (ber-ibil "self-goer") が共用される例もある (Luxus-Entlehnung)。

コーカサスの場合も，政治的・文化的にすぐれた諸民族に囲まれているので，それらから受ける影響は多様である。その最古の層は中世イラン語からの

ものである。ジョルジア語にはペルシア語からの借用語が約600数えられるが，その多くは民衆の語彙に属さず，ペルシアの影響を受けた12—18世紀の詩に用いられているものである（Deeters 1963：34)。ジョルジア語 gvari「親せき，家族」はバスク語 guraso「親，両親」と比較された（Bouda, Tovar 1959）が，Deeters によると，ペルシア語からの借用である。バスク語は gu「われわれ」，gure「われわれの」の派生語。ジョルジア語 ludi「ビール」はオセート語からの借用で，この語はゲルマン語（英語 ale)，バルト語（リトアニア語 alùs)，フィンランド語（olut）にその対応形をもつ。教会用語においてはギリシア語の影響が顕著である。ジョルジア語 ḳvira「週，日曜日」〈*κυριακή*, p̣arasḳevi「金曜日」〈*παρασκευή*, sindisi「良心」〈*συνείδησις* など。スラヴ語および東ヨーロッパでは月曜日が週のはじめであるが(ロシア語 vtornik「第2日目，火曜日」など)，ジョルジア語は日曜日を起算とする：月曜日 oršabati（ori「2」, šabati〔*σάββατον*〕〈アルメニア語〈シリア語)，火曜日 samšabati（sami「3」)，水曜日 otxšabati（otxi「4」)，木曜日 xutšabati（xuti「5」)，土曜日 šabati（ポルトガル語にも日曜日起算の命名が残っている：segunda-feira 月曜日，ラテン語 feria＝*σάββατον*)。

§ 9. コーカサス言語連合

東コーカサス・西コーカサス・南コーカサスの諸語が1個の語族を構成するか否かがコーカサス言語学の中心課題として今世紀初頭からドイツ・フランス・ノルウェー・ソ連の言語学者によって論じられてきたが，いまだに最終的な結論にいたっていない。ソ連の代表的なコーカサス言語学者でニコライ・マルの言語学に終止符を打ったアルノルド・チコバワ（A. S. Čikobava 1958, トビリシ大学）は，上記すべてのコーカサス語が（1）子音三系列体系（2）対格の欠如と能格の存在（3）後置詞的格変化の発達（4）動詞活用形における接頭法（prefixation）（5）他動詞とともに用いる能格構文，の構造的特徴により系

譜的に親族であるとしている。しかしデータースやバンヴニスト(Benveniste)の説くように，言語同族性は何よりもまず音韻対応にもとずく相当量の語彙的・形態論的材料によってささえられねばならず，言語の構造における類型的一致は補助的な意味をもつにすぎない（この点で Trubetzkoy 1939 はしばしば批判のやり玉にあげられるが，同論文は音法則的な相当量の語彙的・形態論的材料が同族性の前提条件であることを言明しているのである：Shimomiya 1974)。印欧語族の場合のように数詞・親族関係語彙・基礎的な動詞における一致が見られず，東・西・南コーカサス諸語間の語彙の比接は50個程度にすぎず，それさえも音韻対応の法則が発見されないかぎりは仮定的なものでしかありえない（Deeters 1963：41)。コーカサス諸語共通の語彙は固有の語彙よりはむしろアラビア語・ペルシア語・トルコ語からの借用語である（Klimov 1969：61)。コーカサス諸語は研究の現段階ではまだ kaukasische Sprachfamilie を形成するにいたらず，せいぜい kaukasischer Sprachbund を構成するにとどまっている（Shimomiya 1975)。

最近の新しい動向として注目を集めているのは，南コーカサス語と印欧語との間にみられる形態音韻構造の類型的共通性である(Gamq̇relidze—Maçavariani 1965)。ジョルジア語はソナントの体系とアプラウトにおいて印欧語の語構造と顕著な一致を示す。たとえば共通南コーカサス語根 *dr-（ゼロ階梯）は語幹形成接尾辞 -eḳ（完全階梯）と結合して他動詞 *dr-eḳ（ジョルジア語 v-dreḳ 私はまげる）を作り，語根の完全階梯 *der- は接尾辞のゼロ階梯 -ḳ と結合して対応の自動詞 *der-ḳ (v-derḳ 私はまがる，かがむ）を作る。同様に *ḳr-eb-（v-ḳreb 私は集める）：*ḳer-b-（v-kerb 私は集まる)。このことからソ連の言語学者ガムクレリゼとマチャヴァリアニ（ともにトビリシ大学）は南コーカサス語と印欧語はユーラシア言語群の中で一つの Sprachbund を構成すること，すなわち indogermanisch-südkaukasischer Sprachbund を提唱した。この説はロマン・ヤコブソンやレーマン（Winfred P. Lehmann）のようなコー

カサス学外の言語学者からも評価されている。

§ 10. バスク語と日本語

この項は大修館『言語』1976年8月号の「バスク語をめぐる諸問題」において公表した。

脚注

（1） 本稿は日本言語学会第71回大会における公開講演（1975年10月11日，京都産業大学）に補正加筆したものである。

（2） フランツ・ボップは1847年，印欧語族のコーカサス語派と題する論文を公刊しているが，これは今日，研究史上のエピソード的な価値をもつにすぎない。

（3） 1974年10月から1975年3月までサラマンカ大学でミチェレナ教授のもとでバスク語を学習する機会を得た。

（4） K. H. Schmidt (1962 : 123) はジョルジア語形を m-aγ-al-i（語根 aγ-「上に」）に分析し，m-da-b-al-i「低い」に対比させている。

（5） G. Devoto: : Etrusco e peri-indeuropeo (in : Scritti minori. Firenze 1967, 79-91) における用語。C. Battisti : Sostrati e parastrati nell' Italia preistorica. (Archivio per l'Alto Adige, 53) Firenze 1959. sostrati で地中海諸語，parastrati でエトルリア語をさしている。

（6） ṗ ṭ ḳ などの黒点は声門閉鎖を伴う音であることを示す。帯気音は何ら補助記号をつけない。以上は Trubetzkoy-Deeters の表記法で，ソ連の言語学者もこれにならう。これに対し G. Dumézil は声門閉鎖音を p' t' k' のように表記する。

（7） vardi「バラ」はアルメニア語 vard からの借用。ギリシア語 *ῥόδον*，アイオリス方言 *Fρόδον*，トルコ語 gül，ペルシア語 gul<*wr̥da-

（8） 現代バスク語では dakusa (he sees it) のように動詞人称形が単純形で用いられる場合は非常に少なく（Lafon1973 : 87 によると，ラブール文語では，助動詞を除けば，わずかに8個の動詞のみ。16世紀には約50個あった），大部分の場合は助動詞＋動詞不定形（原形，過去分詞形，動名詞位格形）の複合形で用いられる。「男は女を見る」の用例においても dakusa の代りに ikusten du を用いるほうが多い。

REFERENCE

Austerlitz, Robert : L'ouralien. Dans : Le langage, sous la direction de A. Martinet,

Encylopédie de la Pléiade, Paris 1968, 1329-1387.＝アンドレ・マルティネ編・泉井久之助監修「近代言語学大系」第2巻『世界の言語』（紀伊国屋書店 1972）の中の「ウラル語族」（小泉保訳，191-270）。

Azkue, Resurrección María de: El vascuence y varias lenguas cultas. Estudio comparativo. Bilbao, Publicaciones de la junta de cultura de Vizcaya, 1949.

Bouda, Karl: Baskisch-kaukasische Etymologien. Heidelberg 1949; —— Neue baskisch-kaukasische Etymologien. Acta Salmanticensia, Fil. y letras, V, 4, Salamanca 1952.

Čikobava, Arnold: Iberijsko-kavkazskoe jazykoznanie, ego obščelingvističeskie ustanovki i osnovnye dostiženija. Izvestija Akad. Nauk SSSR, Lit. i jaz. xvii, 2, Moskva 1958, 113-129; —— Les types fondamentaux de la conjugaison des verbes et leurs relations historiques dans les langues ibéro-caucasiennes. Bedi Kartlisa 41/42, Paris 1962, 26-33 = Communication faite au XXV Congrès International des Orientalistes à Moscou.

Décsy, Gyula: Die linguistische Struktur Europas. Wiesbaden 1973.

Deen, Nicolaas Gerardus Hendricus: Glossaria duo vasco-islandica, edita ab N.G.H. Deen, Amsterdam 1937.（17世紀にアイスランドの Vestfirðir で書かれた）

Deeters, Gerhard: Der abchasische Sprachbau. Nachrichten von der Gesellschaft der Wissenschaften zu Göttingen, Leipzig 1931, 289-303; —— Gab es Nominalklassen in allen kaukasischen Sprachen? In: Corolla Linguistica. Festschrift Ferdinand Sommer. Wiesbaden 1955, 26-33; ——Die kaukasischen Sprachen. In: Handbuch der Orientalistik, I. 7. Leiden-Köln 1963, 1-79.

Gamillscheg, Ernst: Romanen und Basken. Akad. d. Wiss. und der Lit. in Mainz, Wiesbaden 1950.

Gamq̇relidze, T. V. & G. I. Mačavariani: Sonanṭṭa sisṭema da ablauṭi kartvelur enebši. Saerto-kartveluri strukṭuris ṭipologia. Tbilisi 1965（詳細なロシヤ語要約 Sistema sonantov i ablaut v kartvel'skix jazykax. Tipologija obščekartvel'skoj struktury つき。カルトヴェリ語とは南コーカサス語のことである。その要旨は Thomas V. Gamkrelidze: A Typology of Common Kartvelian. Language 42 (1966), 69-83; および Thomas V. Gamkrelidze: Kartvelian and Indo-European. A Typological Comparison of Reconstructed Linguistic Systems. To Honor Roman Jakobson. The Hague 1967, 707-717.

Gaur, S. C. I.: El vascuence en los actuales niños de Guipúzcoa. Euskera 13 (Bilbao 1968), 5-71.

Gulya, János: Aktiv, Ergativ und Passiv im Vach-Ostjakischen. In: Symposion

über Syntax der uralischen Sprachen. Abh. der Akad. d. Wiss. in Göttingen 1970, 80-89.

Hubschmid, Johannes: Mediterrane Substrate. Bern 1960; ——Lenguas prerromanas de la Península ibérica. Testimonios románicos. In: Enciclopedia Lingüística Hispánica, Tomo 1 (Madrid 1960), 27-66.

Izui, Hisanosuke（泉井久之助）:「言語構造論」東京・大阪・創元社 1947, 改訂増補版「言語の構造」東京・紀伊国屋書店 1967.

Klimov, G. A.: Die kaukasischen Sprachen. (Aus dem Russischen übertragen von W. Boeder) Helmut Buske Verlag, Hamburg 1969; ——Očerk obščej teorii èrgativnosti. Akad. Nauk SSSR, Institut Jazykoznanija. Moskva. 1973.

Knobloch, Johann: Charakteristik und sprachliche Stellung des Georgischen. Atlantis 33 (Zürich 1961). 550-555; —— Das Tscherkessische. Vorlesung in Bonn Sommersemester 1967.

Lafitte, Pierre: Grammaire basque (navarro-labourdin littéraire). 2e éd. Bayonne 1962.

Lafon, René: Les origines de la langue basque. Dans: Conférences de l'Institut de Linguistique de l'Université de Paris, 10 (1950-51), 59-81; ——Concordances morphologiques entre le basque et les langues caucasiques. In: Word 7 (1951), 227-244, 8 (1952), 80-94; —— Etudes basques et caucasiques. Acta Salmanticensia. Fil. y Letras 5, 2, Salamanca 1952; —— La lengua vasca. In: Enciclopedia Lingüística Hispánica, tomo 1 (Madrid 1960), 67-97; —— La langue basque. Bulletin du Musée Basque, N° 60 (Bayonne 1973), 58-120.

Lewy, Ernst: Der Bau der europäischen Sprachen. Dublin 1942. 2. Aufl. Tübingen 1964; —— Kleine Schriften. Berlin 1961.

Lopez-Mendizabal: Xabiertxo. Umiei euskeraz irakurtzen erakusteko idaztia. 4° ed. Tolosa 1970.〔バスク語読本〕

Michelena, Luis: Textos arcaicos vascos. (Biblioteca vasca, 8) Madrid 1964; —— L'euskaro-caucasien. Dans: Le langage. Encyclopédie de la Pléiade, Paris 1968, 1414-1437＝近代言語学大系第2巻『世界の言語』（紀伊国屋書店 1972）271-321「バスク，コーカサス語族」; —— El elemento latino-románico en la lengua vasca. In: Fontes Linguae Vasconum, 17 (Pamplona 1974), 183-209; —— The Basque Language. In: Encyclopaedia Britannica, 15th ed. 1974.

Milewski, Tadeusz: Introduction to the Study of Language. The Hague, Mouton 1973.

Pokorny, Julius: Die Sprachen der vorkeltischen Bewohner Nordwesteuropas.

Innsbrucker Beiträge zur Kulturwissenschaft. Sonderheft 15=2. Fachtagung für idg. und allgemeine Sprachwissenschaft. Innsbruck 1962, 129-138.

Polák, Václav: La position linguistique des langues caucasiennes. Studia Linguistica 4 (Lund-Copenhague 1950), 94-107.

Pottier, Bernard: La typologie. Dans: Le langage. Encyclopédie de la Pléiade, Paris 1968, 300-322=近代言語学大系第4巻『言語の構造』(紀伊国屋書店 1972) の中の「類型論」矢島猷三訳, 21-47)。

Regamey, Constantin: A propos de la construction ergative en indo-aryen moderne. In: Sprachgeschichte und Wortbedeutung. Festschrift für Albert Debrunner. Bern 1954, 363-381.

Rohlfs, Gerhard: Baskische Kultur im Spiegel des lateinischen Lehnwortes. In: Philologische Studien. Karl Voretzsch zum 60. Geburtstage. Max Niemeyer, Halle a. Saale 1927, 58-87.

Sandfeld, Kristian: Problèmes d'interférences linguistiques. Actes du 4e congrès international de linguistes tenu à Copenhague 1936 (Copenhague 1938, Kraus reprint 1972), 59-61.

Sarašidze, Georges: Position structurelle du géorgien parmi les langues caucasiques. Revue de l'Ecole Nationale des Langues Orientales, vol. 4 (Paris 1967), 29-63.

Schmidt, Karl Horst: Studien zur Rekonstruktion des Lautstandes der südkaukasischen Grundsprache. (Abhandlungen für die Kunde des Morgenlandes, 34, 3) Wiesbaden 1962; —— Indogermanisches Medium und Sataviso im Georgischen. In: Bedi Kartlisa. Revue de kartvélologie, vol. 19-20 (Paris 1965), 129-135.

Schuchardt, Hugo: Über den passiven Charakter des Transitivs in den kaukasischen Sprachen. Sb. d. Akad. Wien 1895; —— Das Baskische und die Sprachwissenschaft. Sb. d. Akad. Wien 1925; ——Primitiae Linguae Vasconum. Einführung ins Baskische. 1923, 2. Aufl. von A. Tovar, Tübingen 1968.

Schultz-Lorentzen: A Grammar of the West Greenland Language. Meddelelser om Grönland, Bd. 129, Nr. 3, Köbenhavn 1945,reissue 1967 (デンマーク語版 1930)。

Shimomiya, Tadao: Entwicklung der Relativpronomina im Georgischen. Lehnsyntax aus dem Indogermanischen? KZ 87 (Göttingen 1973), 222-227; ——「トゥルベツコイの印欧語民族考によせて」弘前大学人文学部紀要 (1974), 21-46; ——「印欧言語学と言語連合の問題」(エネルゲイア刊行会編「言語における思想性と技術性」東京・朝日出版社 1975) 91-107.

Skalička, Vladimir: Sprachtypologie und Sprachentwicklung. To Honor Roman Jakobson. Mouton 1967, 1827-1831.

Tovar, Antonio: La lengua vasca. 2° ed. San Sebastián 1954; —— El euskera y sus parientes. (Biblioteca vasca, 2) Madrid 1959.

Trubetzkoy, N. S.: Gedanken über das Indogermanenproblem. Acta Linguistica 1 (Copenhague 1939), 81-89; —— Der Bau der ostkaukasischen Sprachen. Aus dem Nachlass herausgegeben von J. Knobloch. Wiener Slavistisches Jahrbuch, 11 (Wien 1964), 23-30.

Tschenkéli, Kita: Einführung in die georgische Sprache. 2 Bde. Zürich 1958.

Tsunoda, Tasaku "Gunira": *Gali* Constructions and Voice Expressions in Waruṇu. Gengo Kenkyu 67 (1975), 58-75.

Uhlenbeck, C. C.: La langue basque et la linguistique générale. Lingua 1 (1947), 59-76.

Villasante, Luis: Hacia la lengue literaria común. Serie "Luis de Eleizalde" sobre unificación del euskera escrito, fasc. 1. Editorial Franciscana Aránzazu, Oñate, Guipúzcoa 1970.

Vogt, Hans: Arménien et caucasique du sud. NTS 9 (Oslo 1938), 321-338; —— Le basque et les langues caucasiques. BSL 51 (1955), 121-147.

Worth, Dean: Paleosiberian. In: Current Trends in Linguistics, I. Mouton 1963, 345-373.

〔欧文要旨〕

Le basque, le caucasique et la linguistique générale

(résumé)

Tadao Shimomiya
(Université Gakushuin, Tokyo)

Le basque (parlé par 0,5 million de Basques français et espagnols, euskara unifié depuis 1970) et les langues caucasiques (une quarantaine de langues parlées par cinq millions) ont attiré l'attention des linguistes à cause d'un série de traits grammaticaux qui ne sont pas connus en indo-européen.

Historiquement, le basque et le caucasique pourraient être les derniers résidus des langues mal définies qui forment un vaste continuum sud-eurasien avec un groupe de langues dites méditerranéennes disparues avant les invasions pré-indo-européennes et indo-européennes. Géographiquement, les deux langues sont péri-indo-européennes (ou para-indo-européennes, au sens de G. Devoto et de C. Battisti). Typologiquement, elles sont des langues ergatives (Schuchardt 1895, Trubetzkoy

1939). Géographique-typologiquement, le basque appartient à l'aire Atlantique caractérisée comme 'flexionsisolierend' (Lewy 1942). Aréalo-fonctionnellement, le basque appartient au Litoral-Bund, dans l'état de culture il est une 'Entwicklungssprache' (Décsy 1973).

Nous avons essayé une comparaison typologique entre basque, caucasique, indo-européen et ouralien (Makrotypologie au sens de Skalička 1967) en raison de quelques traits phonétiques et morphologiques : 1. les plus anciens textes, 2. vocalisme et consonantisme, 3. préflexion, 4. introflexion, 5. sufflexion, 6. ergatif, 7. genre grammatical, 8. système vigésimal, 9. polypersonalisme, et 10. proposition subordonnée.